

社会福祉の原点

おやまとあじさいむら
大倭紫陽花邑から



矢追日聖

(大倭教法主)

自他の幸福を祈る

去る八月五日、Kさんから「福祉」について何か書いてほしいとの依頼状が届いた。今の私にはペンを持つ時間が殆んどないので逃がたいのが本音であるが、彼から声をかけられると気持の何処かにいつまでもそれが残る思いがするので、仕方なく自分の気がかりの念を消滅するために、つまり自己救済のため、彼の要求に応えることにした。

考えてみれば私の精神的構造は宗教人に仕組まれているようだ。白髪になった現在それ

ははっきり言えるのである。私は多くの人間関係をもっている。類をもつて集まるのかも知れないが、彼等の殆んどは人生は幸福でありたいと言う。換言すれば喜びをもった心で生涯を暮らしたいと言うことである。所が現実はその祈りとは正反対方向に動いている場合が多いのに気がつく。

宗教人の宿命は、社会の総ての人々が、その人に相応した個人の人間形成の問題や個人家庭の幸福、更に拡大して福祉社会の実現などを祈ることを基盤として、その方向へ世の人々を一人又一人と神のまにまに教化指導するところにあると私は信じている。けれどもう一步前進して、現代社会の経済体制の中で

個人家庭をもつ人々が、自衛本能を極度に強化する意味で、自他の幸福を真心から祈り得る人が果して今の世にあるのだろうかと考えたくなる。宗教人を自任する者は、先づ自から福祉社会構成員の一員たり得る人格を身につけることが先決問題と思う。

相互扶助的な相互関係をもつ社会の中で生かされている私は、常に自分の生涯が喜びをもつて暮らしたいと念願してきた。然し事実はそううまくゆかない。協同体的な現代社会から自分一人を切離して、自分だけが倅せに暮せる方法はないものかと言った愚智を若い頃何回か繰返したものだ。何時か知らないが、そうした逃げる態度から踵を返して社会人と

四つに組む中から自分の倅を見出すようになった。恐らく十八歳ごろだったと思う。爾来、私はものの総てを前向に考え行動するようになった。と同時に一身上に起った総ての事柄は、殆んど自分以外の人にその責任を押しけない人間になることができたのである。無限大なる倅を加美から賜った訳である。大倭紫陽花邑は私個人の思いが形として顕現した地域的福祉社会である。言はば私の心の影でもある。

福祉の本質

終戦直後は福祉国家建設、最近になって社

会福祉と言った言葉をよく聞くようになった。誠に有難い傾向と思うが、人々は果して福祉の本質を分っているのかどうか疑いたくなる。福祉とは幸福やさいわいという事で、字の読める人なれば誰でも理解できる。辞典では消極的には生命の危急からの救い、積極的には生命の繁栄と、宗教的な解釈もしている。

資本主義国家では、完全雇用社会保障政策によって、全国民にたいして最低生活の確保と物的福祉増大をはかることを目的とした経済体制をとっている。そこで国民の最低限度の生活を保障するため貧困者には生活に保護を加えたり、公衆衛生や共同募金などの事業を公的に行っている。それには生活保護法、老人福祉法、児童福祉法、身体障害者福祉法などがあり、法の定めにしたがって国または地方公共団体がそれを行っている。また社会福祉事業法によって設立された社会福祉法人は、福祉施設を設置運営すると言うように福祉社会としての仕組は整然とできている。勿論これは薄い行政上の問題であるが、社会福祉はかなり厚い層をもつものと私は考えている。

人々は本質的に、誰もが幸福感に満ち足りた生活を望んでいると思う。世に言う幸福感

は自分の思わく通りの結果が現実化したときの喜び心を指しているように私には見える。とすれば幸福感は断続的に繰返すもので、悩みの相対的な一時的現象に過ぎないと言える。真の幸福感とは永続的なものでなければならぬと思うのである。

人間には個人差がある。然し総ての人々は事実、大自然がもつ各種の条件(加美の恵み)によって生かされているため、生きる方法については人それぞれ工夫があり、相異った方向に動いている。自分の思いに合った衣食住を確保したいという欲求だけは、多くの人に共通する目的のようである。この中に異性間に起る愛憎の葛藤、物質的金銭のからくる利害関係、権勢欲と権力者への隸属、優越感に毒された権威者への憧憬、病患の苦悩など、喜怒哀楽が織りなす人間模様を画きだし、諸行無常の風に吹かれながらこの世を果てるのが人生の定められた宿命のようだ。人間は一生幸福でありたいと願いながら、何故、横道にそれてわざわざ不幸の淵へ落ちなければならぬのか。これが肉体をもち、この世だけの心の世界にのみ生きる人間の常道であるのかも知れない。

終身保障の地域社会

本年三月一日付をもって、奈良市は通称町名「大倭（おやまと）町」を設定した。現在この町内に住居する者は大倭紫陽花邑の邑人だけである。この邑は古都奈良の右京の西はすれで、緑と起伏の山あいの中、しかも宅地造成の近代化されつつあるその真只中に在りながら古代の匂をただよわせて横たわっている。奈良、大阪を結ぶ幹線、阪奈道路を挟んで奈良国際ゴルフ場がある。そのクラブ・ハウスの南隣接地の森がこの邑の所在地に当り、約一万坪たらずの地域がある。

現在みるこの邑は、もとを質せば矢追日聖という個人家庭に端を発し、それに二十五年という歳月の積重ねと、家族邑人全員の真摯な協力を相俟って今日に至っている。

私個人の家庭を今も「大倭一門」と称しているが、その家族数は平均して五十名前後を保っている。この一門家族は言うまでもなく一つ財布に一つ釜で、現代流に言うならば、世にも稀な終身保障の地域社会と言える。組織をもつ制度ではないので、勿論、終身保

障に対する家族への何ら義務づけする類の定めはない。人々はこの家族を協同体と称しているようだ。ほかに隣保家庭と称するものが邑内に十数世帯がある。これは財布だけは一門と切離しているがそれ以外のことは一門と変りない。

また宗教法人大倭教（全国）、宗教法人大倭大本宮（地方）、社会福祉法人大倭安宿苑（あすかえん）、奈良県立菅原園、大倭殖産株式会社、大倭交商株式会社、交流の家（むすびのいえ）など多色彩なものが調和の姿を保ちながら各々その主体性を十分に発揮しつつこの邑の空気で生きている。

申すまでもなく協同体と見られている大倭一門は、この邑否大倭教（神ながらを基盤にもつ宗教）の母胎であり、この邑の中枢をなしているが、それは宗教的、信仰的な集いでもなければ、社会福祉的、慈善的な救済集団でもない。無計画の計画により、組織なき組織で形は造られ、無統制の統制によってその動きを示しているのである。

強いて言うならば、わが一門家族は、お互が死ぬまでの苦悩を出来る限り少なくするように努めながら、家族達は相互扶助の心で結び合って、墓場へ近づくその日、その日を楽

しく暮してゆくという世間並の単調な生活体に過ぎないのである。本質的な社会福祉の原種はこうした中に埋もれているのではなからうか。

多色彩の調和

人として生きる者は、誰もが飯を食べ、クソを垂れなきやなるまい。であればクソを造る材料は自分で稼ぎ獲得しなければならぬ。ここまでは動物共通の基本的なものであるが、こんなことの繰返しのみで、万人が否一人も漏すことなく絶対に到達しなければならぬ崇高な「死」を迎えるとすれば、単なる動物的製糞機で終るとすれば、人間としての生甲斐や楽しみは無くなってしまふ。私には耐えられないものがある。それ故に私は加美（自然）の仕組に対し、私心なく順応することが生涯の本質的享楽と自覚し、身に体して今に至った。

ここで言う本質的な楽しみは、世に言う清濁併呑である。これには難多な人間がもつ諸問題を醸している。つまり、私は普通の人が苦にするような事柄でも素直に受入れて、そ

の綾なす変化に楽しみを見出しているのである。苦から逃れて楽しみを得るというのではない。加美は一切のものを「顕幽不二」「愛憎一如」のように相対的にして一体的に仕組んでいるから、私はこの根元なる加美の摂理を知り、それに触れ、それを吾が心に納める

ためには、永い歳月の間血の出る思いで実践を通し、不完全ながら私の宿命の範囲だけは体得してきたつもりである。大倭一門という集団家庭は、こうした心の基盤から終戦を契機として自然に生れ出たものである、何かの理想を画き、人智の限りを絞って造り出したものではないことを私から言明しておきたい。今この邑に居住している人は約三百人に達している。折にふれて思うことだが、ようもまあ！こんなに顕著な特徴をもつ人間が、

よりもよってこの邑へ集まって来たものだととも人間業とは思われないものがある。見方を変えて言うならば、生涯退屈せずに楽しめるオモチャを加美様が私に与えて下さったものとさえ思える節がある。

加美は、花一つでさえ数知れない種類を作っている。若し、地球上に唯一色の花で満ちていたとすれば、花を見る感覚は砂漠を見るに等しいものがあるであろう。大倭の邑人の

宿縁の地

中には、私に反抗する者や盲信的追従者もある。また、私を宗教人や社会事業家と見る者や、邑の最高権力者と見ている者もある。私個人の中にそのように見る多くの要素が内在しているとすれば私は恵まれた人間として誠に有難たい。たとえ人が何と言っても私は私である。若し多色彩が調和を保つ加美の摂理に添う大倭紫陽花邑であるならば、私が生存する限り否、死後にあつてもこの邑は磐石の構えを見せながら神のまにまに転化の道を歩んでゆくものと私は信じて疑わないのである。

ここ大倭の地はもと須加宮（すがや）といひ、聖武天皇の皇后に立つた藤原安宿媛（あすかひめ・光明皇后）幼少の頃からの宮宅地であり、皇后は初期の試みとしてここに悲田院、施薬院を創設されたと伝えてきた。言はば日本に於ける社会福祉事業（昔は慈善事業）発祥の地となる。ただしこの問題に関しては歴史的裏付をする資料は今のところ大和では見つからない。私は歴史的な問題は論外として、こうした尊い傳承のある土地で、悠

久千三百年来埋もれていた皇后の心を今の世にこの縁り深き須加宮の地で再現することの重要性を痛感するものである。私は昭和二十二年から此の地で姿なき女性光明皇后と肉体をもつ私が家族の形で同居しているのである。皇后には多くの家の子がいるので、私は毎日を賑かに暮すことができる。

地下水の如く清く流れ

紫陽花の如く美しく咲け

は、皇后が紫陽花の一輪を見せて、私に示された言葉である。これには現界に居る私に対し、霊界から彼女の宿願を託されたものと私は受取っている。

昭和三十年だった。皇后の慈善博愛の強き思念や私がつ「神ながら」信仰、それに加えて終戦から十年にわたる社会情勢の変革、邑の転化等多くの条件が一九となって社会福祉法人大倭安宿苑がこの宿縁の地に誕生し、同三十一年から発足を見るようになった。

当初は、「身体上又は精神上、著しい欠陥があるために、独立した生活を営むことができない人々に生活保護を行うことを目的とする」救護施設（生活保護法）須加宮寮（すがや）で、この種の施設は奈良県下では最初の設置であった。発足時の入居定員は三十名だ

子どもとのかかわりの中で

■学童保育の現場で考える

奈良 玲子

(日本女子大学家庭福祉センター
みどり学童保育クラブ)

「ママ/ママ/だっこ」と腰かけている私のひざにのっかり首に手をまわし、自分のほつぺたを強くこすりつけたら、口びるをくつつけたりしてくる。ひとしきり、五分位の間続けられる。(もちろん、自分の母親をママとは呼んでいない。ママとはやさしい母親像の代名詞である。)時には「おい奈良!」と言つて乳房をわしづかみにされたり、お尻に前後から指をさしこまれたり、思わずドッキリする行為がくり広げられる。

みどり学童保育クラブは東京都に二百余りある学童保育クラブの一つで、足立区本木町にあり、小学校一年から三年の四〇名の子どもたちが放課後やつてきて遊んだり勉強したりしている。彼らは、両親が共働きだったり母親が病氣だったり放課後の生活の世話をする者がいない子どもたちである。このあたりは東京でも低所得家庭の多い地域で、貧困の問題をかかえている。筆者は、このクラブの二人の指導員の一人で、かつてキブツに二年余り滞在した経験もあり、ここで働きはじめてから四年目になるという。

——制作部

こどものこういう行為を抵抗なく受け入れられるようになったのは、この仕事を始めて三年目位からだだった気がする。その手を静かにのける。そして、その手をしばらく握って話したりしているうちに、その子は落着いた気分になり、他の子どもたちの方に向って遊びに行く。

もちろん、私たちは母親ではないのだから子どもにこういう要求を全面的に受け入れることはできないし、また私たちがすべきことではない気がする。しかし、子どもの極端な行為を否定しながらも、その子の人格を全面的に受け入れていることを表わすことは非常に難しい。こちらの具合の悪い時は、思わずその手をはらいのけてしまう。ふりはわかれた手から子どもは拒否を受けとり、反発を感じるのである。事実、「奈良のバカ!おまえなんかアタになっちゃえ!」と罵倒をあげせその場を去っていく。

この子の名を稲山きみ子と言う。4月に入ってきた時は、横目で私たちをにらんで通りすぎ、「何だてめえ!」と男みないな口をさき、私たちと殆んど関係を持とうとしなかった。時々近づき、胸やおしりをさわり相手の反応をためしていた。笑ったり泣いたりとい

ったが、今は百名に増員している。次でそれから十年を経過した昭和四十一年には特別養護老人ホーム(老人福祉法)、長曾根寮が新設された。ここは六十五才以上の者で「身体上又は精神上、著しい欠陥があるため常時介護を必要とし、かつ居室においてこれを受けることが困難である人々に対して養護することが目的である」と定められている。

更に此等の福祉施設に隣接して、昭和四十五年に奈良県立菅原園が設置された。勿論、大倭の福祉法人が受託運営する約束があったからでもある。もとは重度肢体不自由者更生援護施設だったが、今年度の法の改正に基づき「身体障害者療護施設」(身体障害者福祉法)に改められた。定員は五十名、本年四月からの発足にて、全国四ヶ所の一つである。この種の施設は「身体障害者であつて、常時の介護を必要とするものを収容して、治療及び養護を行なう施設とする」と定められているのである。

この様に大倭にある三福祉施設は各々特殊性をもっているが、共通する所は、この三施設に入園している人々は、ここが終生の生活の場であり、終焉の地でもあると言える。更に

楽しんで日々の精進を

私は十六年間大倭の福祉施設を育てて来たが(精神的)、法に基いての運営であるからそこには幾多の問題点はある。然し私は大倭の施設へ入園する以前の住居者の家庭を眺めるとき、そこに重要な幾多の社会問題が個人家庭の中に押つぶされて潜んでいる事実をひしひしと身にこたえるものがある。

これと同時に最近の福祉施設の在り方と言へば、肝心の福祉精神を忘却して福祉事業に専念する傾向が特に顕著になってきた。建造物の優劣を競つて、より豪壮なものへと変移してゆく現象は端的に其れを物語っているようだ。施設で働く職員達、特に介護の任に直接たづさわっている保母や寮母達の待遇の向上を図ることも有難いことだが、又その反面施設運営の上から職員の辞職を恐れて手のか

かる入園者は体よくこれを避けるという利巧さ、こうした事実を見るにつけ、思うにつけて一入悲みの切なるものがある。広く社会福祉の立場から見れば、福祉施設はその一部分の存在に過ぎない。しかるに年と共に高額な公的費用を投入して、こうした各種の施設が全国的に増設されつつある現状のようだ。恰もそれは犯人逮捕にのみ囚われて防犯を軽んじ、治療にのみ専念して予防を忘るるの類に等しいのである。

社会福祉の原点は社会的連帯性をもつ家庭の中になければならぬと考える。若し総ての家庭が経済的基盤を確立し、家族達は相互扶助の心をもつて仲良く調和が保たれたとすれば、其処に自から立派な福祉社会が生れるのは理の当然と私は思う。然しこれは永遠に実現不可能な単なる空想に終る事実を吾ながら認めざるを得ない、哀愁の限りである。

私個人は世にも稀な恵まれた人間の一人である。それは加美のお陰で私は安心した「死」につける大倭紫陽花邑の舞台が与えられたからである。この喜びを私は命の果てるまで、気の向くままに宗教活動や社会福祉の面で広く社会人へ還元する覚悟のもとに楽しんで日々の精進を続けているものである。

う感情の表現はこの子にはなかった。子どもの間でもエッチとして有名だった。3年生の姉のスカートをめくり「きみ子、やだよ」と言われる位だった。彼女は小さい時から保育園に入れられ、保育園の生活が続いた。家で母親のひざに座り、乳房を求めるが、その手は「いつまでも甘ったれるんじゃない」と時にぶたれ、いきおいよくふりはられる。今でも指しゃぶりをする。夜寝る時指をしゃぶり、昼寝の時もタオルでかくしてチュチュとやっている。

彼女はエッチなのではない。幼児期に母親により満たされるべきものが満たされずイライラしているのである。

今、少しづつ私たちとの信頼関係を通して変わり行くきざしを示している。除々にさわる回数も減ってきている。

小川知子 「先生、頭が痛い」と訴える。

「それじゃ、トランプしよう」と誘って始めると全く忘れたように直ってしまう。しばらく同じことが繰り返された。彼女は、自分の住んでいる近くの団地の五階を見て、お母さんがちらっと見えると、「お母さんが呼んだから見てくる」といったりする。また、「頭

が痛いからお母さんの仕事場に電話をしてくれ」とか、「お母さんが迎えに来ると言ったから」と一日中カバンをしょって何もせずに外で待っていたりした。一方、母親は迎えに来るなり、「知子ノ早く、何をぐずぐずしてゐるんだ」と最初からケンカごしで顔はしかめつら、子どもは無表情に帰っていく。この母親が父母会で「こんな憎らしい子はいない。知子と呼んでも返事しない。先生どうしたら返事をするようになるでしょう」とたずねる。

私たちはクラブに子どもが学校から帰ってきた時、「おかえりなさい」と言う。「ただいま」と返事をしないからと止めてしまうのでなく、私たちが一方的に繰り返している。子どもが「ただいま」と返事するのは2ヶ月位たつてからだという話をした。

その後、母親は「おかえりなさい」と知子を迎えようと、うれしそうに「ただいま」と言うにつこり笑った」と報告に来た。そしてある日は、自分の庭に咲いたというオニユリの花を一輪持ってきた。間もなく、夏休み中には、子どもたちのオヤツにと、サンドイッチを作った。父母とも病身で生活保護を受けている生活でできる最大のこと

ほど表情が変わった。彼女は「人間わしくなかった。前は何かとびついてバツタみだった」と言う。

子どもが変わっていくのに早くて半年、多くは一年以上かかる。私たちが一人づつを理解し、受け入れることによって確立される信頼関係を基に、また友だち同志の相互批判、援助により、自分を生かし他人をも生かす場を作っていく。自律の精神も養っていく。

コップを洗う。父母会に来る母親のためにぬかるみに板を渡す。玄関を掃除する。自分たちの所を自分たちで自らきれいにしようとする。こういう自主的な行動を私はすばらしいと思う。

自分のことを理解し、よくしてくれる人にはよくしたいという気持になる。私たちのしようにすることをすみやかに理解し行動に移す。テーブルをふこうと思つてふきんを持っているとさつと寄ってきて黙つてふいてくれる。ポリバケツをとりこんでくれば、さつとかけ寄ってきて持っていくくれる。おやつの時間にみんなで座つて、一人足りないことに気づき呼びに行こうとすると、「ばく行つてようか?」と言う。

それは決して、先生が子どもを一方的に指導したり、監督したりして、表面的な秩序と規律のみを守る場からは生まれてこない。子どもと同じレベルで生活を共にする自由でいきいきとした集団の中でのみ生まれるものだと思う。そして、そこにこそ、まさに本場の規律と秩序があるのだ。

私たちのクラブにくる子の家庭は、ほとんどが父母ともに働き、やつと家計を支えている。母親の就労により、かろうじて生活保護世帯におちこまずに生計を維持している場合が多い。母親はほとんどが一時間一五〇円前後の中小企業のパートである。肉体労働、そして家事労働、その生活はまさに血のにじむ毎日である。

私たちは母親に、もっと子どもの話をきいてほしい、ハダでふれ合う時間を持つてほしいと言いたい。三つの例とも子どもの情緒不安定の直接の原因は母親の態度にある。忙しく疲れている母親は、甘えてくる子をはらいのけることも多い。それでもなおと言うのは、余りにも苛酷な要求である。現代の貧困の問題が母親のみにその矛盾がシワよせされてはならないと思うからである。

であつたのであろう。

子どもが、私たちとの信頼関係を通し明るくなっていく。そして、その子を通して母親も変わる。そして子に対しても変わっていく。

金丸賢二

夏休みのある日、クラブを開けると皆んなの棚や床にアリが一杯いた。彼はさつとホーキを持ってきて数人の子と一緒にはき出した。暑い夏、水を飲んだあとのコップが流し一杯になっていた。黙つて洗剤をつけてあらっていた。ある時は玄関をせっせと掃除をしてくれ、ある時は板かべの落書きをシンナーで自らふくと言う。私たちが一年生に後片づけをするように言っていると口を合わせ「片づけるんだ」と言ってくれる。二年生である。一年生に入った時は、私たちの背中にとびついてばかりいた。入学当時の毎日、学校の押圧からやつと解放された喜びで大声をただ出していた。ある雨の日、自分たちで作った折紙の輪つなぎをひきずつているうちその色に興奮し、大声をあげながらひきちぎり、部屋中にまき散らしたこともあった。今その片りんも見られないほど落着いている。一年ぶりに訪れた実習生が、たまたま母が離婚して、姓の変つた彼を、別の子かと思つた

社会福祉の問題が、心理的精神的人間関係の調整のみでは解決できない面に目を向けざるを得なくなる。働いてもなお貧しい人々、父親の不安定な就労形態、すなわち日給月給の労働者であり、中小企業の被用者である。まさにそこにこそ問題があり、子どもの情緒不安定が決して母親の怠惰によるものでないことを知るべきであらう。

小川も金丸も生活保護世帯である。小川はバナナを買ったところを近所の人に見られ、この八月に保護を打切られるという。肝臓炎の夫に食餌療法をしなくてはならぬ。良質のタンパク質と野菜果物を多くとるように医者に言われている。足立区から赤羽まで一円で安い店を探して買いに行く。母は血圧が高く血もろく貧血で時々たおれる。双方とも病身でも保護を打切られ働かざるを得ない。また病気で被保護世帯にまいもどる日も近いだろう。そして、このくり返しが肉体的荒廃を招き命を縮めていることは、時々目にし耳にする近隣の父親の若死でも明らかである。まさに、自らの労働力を荒廃させる以外に生きるすべを持たないのである。

子どもの問題は、同時にその経済的背景をもぬきには考えられないのである。